

八ガ岳の主峰・赤岳（2899m）へ

岩井 淑

夏山登山最盛期はすでに過ぎ、ウィークデーのキャンプ地はとても静かだ。昨日8張りあったテントも今日は5張りに減った。ここは標高2220m。八ガ岳連峰の核心部、硫黄岳・横岳・赤岳・阿弥陀岳のふところに位置し、紅色のヤナギランが咲く赤岳鉦泉キャンプ地。

都市部の喧騒から離れ、鳥のさえずりで目覚め、日の出とともに行動し、喉が乾けば沢の水でうるおし、日没とともに大地に横たわり、宝石をばらまいた如くの満天の星を眺め、水音をバックミュージックとして眠りにつく。何万光年という光と、あるいは何億年という山々と対話することによって自分自身を見つめ直す。

以下の記録は、八ガ岳連峰の縦走を4回のコースに分割した時の第1回目のものである。

8月23日（水） 快晴・無風

赤飯と味噌汁の朝食を済ませ、いよいよ八ガ岳の中核部への登山を開始する。

登り始めて45分。針葉樹林帯を突き抜けてハイマツ帯に入ったため、一気に視界が開け、前方の硫黄岳頂上が見え始めた。更に5分程登ると赤岩の頭へと到着した。ここからの眺めも抜群であるが、360度のパノラマを楽しむために先を急ぐと、地面にバックリ大口を開けた爆裂火口を持つ硫黄岳山頂に到着した。

広い山頂である。ガスがかかった時に火口への落込み防止とコマクサやチシマギキョウを始めとする高山植物を保護するためにナイロンロープが火口端から5mの所に張られている。端に立つと火口に引きずり込まれそうだ。それにしてもこの火口はすさまじいエネルギーの噴出を感じさせる。火口北面を完全に吹き飛ばしているのも驚きだ。北面下には夏沢峠に建つやまびこ荘、こまくさヒュッテや、ちょっと下った所に建つ本沢温泉の赤い屋根が緑の樹林帯に浮かび上がって見える。

山頂からの展望は、南・中央・北アルプスは言うにおよばず、日本の中部山岳地帯の峰々がぐるっと一望出来る。勿論、富士山も広い裾野を広げてすっきりと立ち上がっている。

大きな5つのケルンとロープで整備された登山道を20分程下ると硫黄岳石室に出る。その登山道の右下方にキャンプ地の赤岳鉦泉が見える。足元にはコマクサが花期は過ぎたとはいえ無数に咲き乱れている。紫色の花を咲かせるウルップソウは残念ながら総て咲き終ったあとである。イワヒバリが1mの距離まで近づいてきては、さかんにコマクサの実をついばんでいるのを初めて目撃する。

石室の脇に駒草神社が建っており、その名が示すとうりまさにあたり一面はビッシリとコマクサだらけである。こちら一帯は白田営林署の管轄で八ガ岳植物園に指定されている山上のお花畑である。トウヤクリンドウが白い花を上向きに咲かせ、ミヤマダイコンソウは黄色の花を咲かせている。

さあ、気を引き締めて横岳主峰への登山を再開しよう。

岩と砂れきの中を歩き始める。いよいよ鎖や鉄梯子が次々と登場する。今回の登山コース

で最も手強いといわれている場所だ。慎重に足場を確保しながら進む。足元がスパッと落ちている所はやはり緊張する。しかし、鎖場の緊張も5分程で通過し、横に長い横岳の主峰2835mの山頂に到着した。奥の院と呼ばれているが、ほこらや碑は建っていない。山頂にはすでに5人の登山者が登頂しており、メモを取っている内にも9人の登山者がやってきた。左手（東側）の佐久側は緑に覆われているので威圧感はないが、右手（西側）の諏訪側は足元からスパッと絶壁である。それにしても見事な光景である。

これから赤岳へと向かうわけだが、1番緊張する場所を通過したとはいえ、次々と鎖や鉄梯子が登場する。その緊張感をソッと和らげてくれるのが、タカネツメクサやタカネナデシコやウスユキソウを始めとする小さな花達だ。これらの草花を踏みつけないように歩く。

赤岳頂上小屋に着いたのは10時。予定より1時間50分も早い。この小屋の直下100m程の岩場の直登はきつかったが、途中で休むのもしゃくなので一気に頂上まで登りつめた。横岳から1時間で歩いたことになる。

途中の地蔵尾根から行者小屋へと下る分岐点に、西側を向いたお地蔵さんが置かれていた。とてもおだやかな顔をしたお地蔵さんだった。

赤岳頂上では10人前後の登山者が三々五々休憩をしている。八ヶ岳の最高峰・赤岳山頂2899、2mから今まで登って来た硫黄岳、横岳方向を振り返ると右側の佐久側は湧き上がってくるガスで白一色となったが、左側の諏訪側は相変わらず展望がよく、来月、16kmレースを走ることになる諏訪湖も淡青色の静かな湖面を見せている。しかし、朝方にはハッキリ見えていた穂高を始めとする峰々は雲のなかへと姿を隠してしまった。

山頂小屋に行き、ビールを2本買い求め1本をランニング姿で食事の若者に渡し、無事登頂の記念に乾杯をする。20代の若者は途中途中で顔を合わせては挨拶をしてきた仲である。

「わあ、うれしい！」などと言い、本当にうれしそう。あれこれと雑談しながら、こちららも昼食の準備に取りかかる。ガスコンロとコップを携帯してきたので、レトルト食品の白米とシューマイ入りカレーを10分ほど暖め、そのお湯で味噌ラーメンを煮る、という手順である。

山頂で食べる食事は携帯食のため決して豪華とはいえないが、展望のよい景色こそが最高のおかずなのではないかと思う。こういう時に飲むビールも実に旨い。

1時間の昼食・休憩後、阿弥陀岳へ向けて再出発である。

1等3角点の置かれている頂上から中岳のコルへ向けての下山を開始すると、山頂直下はかなりの急坂であり鎖や鉄梯子がここでも連続する。60才代と思われる夫婦連れやザックを担いでゼイゼイ息をはずませながら登ってくる方を見ていると、頑張っているなあと思う。

コルに降りると両側ともハイマツとシャクナゲにびっしり覆われ、根本ではゴゼンタチバナが真白な小さな花を咲かせ、タカネバラの実も膨らみはじめ、緑色から艶やかな赤色へと変化している途中である。突然、「ピュールル、ピュールル」という鳴き声とともに10数羽のイワツバメの飛行編隊が真白な雲を背景に気持ちよさそうに急上昇・旋回・急降下を繰り返している。その下方では喉を枯らしたホシガラスが「グゲー、グゲー」と鳴き、自己のテリトリーを主張している。

さあ、中岳から阿弥陀岳へ向かおう。

5分程の急登で中岳山頂へ到着し、赤岳を振り返るとワァッと覆いかぶさってくるような迫力である。最後の阿弥陀岳は目前に迫っている。すぐそこではあるが、1度、行者小屋への分岐まで下ってから登り返すので手強そうである。手強いという予想ど通りに山頂への道は急登に次ぐ急登であり、鎖や鉄梯子は登場しないが、気をつけなければならない。また、こういう場所は登りよりもむしろ下りにより注意力が必要な所だ。

初夏にピンクの可愛い花を咲かせていたコケモモは、直径4～5ミリの実を付けている。摘んで口の中に入れ、噛んでみるとスッぱい。シドミ(クサボケ)の味だった。

2807mの阿弥陀岳山頂へ登ると、20m程の平らな広い山頂でいくつもの遭難者の鎮魂碑や石碑、台座を含めると120cm程のお地蔵さんが赤岳を背に鎮座していた。この山頂は今まで登ってきた山頂と比べて、何か異様な感じがし、背筋が寒くなるのを覚えた。空は急速にガスに覆われ、登り始めた時には南方に見えていた権現岳から編笠山もその姿を消してしまった。

1989, 8, 23, 記

八ヶ岳登山計画書N01

住所：船橋市東船橋 3-23-6 北パークハイツ203
 名前：岩井 淑
 年齢：40才
 性別：男 職業：NTT相模原
 電話：0474-22-5297

目的地：硫黄岳，横岳，赤岳，中岳，阿弥陀岳

日時：1989, 8. 22~8, 24

コース：赤岳鉱泉キャンプ場をベースとして周回コース

美濃戸口~赤岳鉱泉~硫黄岳~横岳~赤岳~中岳~阿弥陀岳~赤岳鉱泉~美濃戸口

8, 22

相模原	八王子	大月	甲府	茅野	美濃戸口	赤岳鉱泉
9:18	----- 9:32					
	9:38	----- 10:22				
		10:41	--- 11:28			
			11:44	-- 13:01		
				13:50	----- 14:42	
					15:00	----- 18:00
						3:00

8, 23

赤岳鉱泉	硫黄岳	硫黄山荘	横岳主峰	赤岳石室	赤岳
7:00	----- 8:30				
	8:40	----- 9:00	----- 10:00		
			10:10	----- 11:00	
				11:10	---- 11:50
					12:20

中岳	阿弥陀岳	行者小屋	赤岳鉱泉
--- 13:00			
13:10	---- 14:00		
	14:10	----- 15:20	
		15:30	----- 16:00

8, 24

赤岳鉱泉	美濃戸口	茅野	甲府	立川
8:00	----- 10:15			
	10:55	----- 11:47		
		12:55	--- 13:58	
			14:33	----- 16:27